ないか、とじっと我慢の子。

二年生になって新たに十名の仲間が加わり計四十名。ここで校庭隅のマッチ箱校舎に。但し教室のそのものは下級生に占領され、我々はその廊下に机を並べてお勉強。三年生になってやっと本校舎三階に一室を与えられた。我々が昭和二十五年三月に卒業した後、四月に附属中学名物、河地先生が着任。三年生になった二期生を担当された。

一期生は昭和三十一年に出来た校歌を知らず、昭和五十六年の弘明寺移転も無縁。全ての思い出は立野の丘に詰まっている。立野の丘よ永遠なれ！

三・同窓会設立へ

私が最初に附属中同窓会を創ったのは大学二年生か三年生（昭和三十年か三十一年）頃。大学生活も少し落ち着いて「そうだ同窓会を創ろう」と思い立って、二代目生徒会長だった野崎君（二期生）に連絡。「オイ、同窓会を創ろう。手伝ってくれ」「判りました」同期の穂苅君、三期生の澤山君にも声をかけ手探りでスタート。学生服で附属中の卒業式に出席し挨拶したりした。後年、河地先生に「卒業式での新井さんの詰襟服姿憶えているよ」と言われてテレ笑い。

その後卒業。社会人第一歩が支店（北海道小樽）だったため、同窓会活動は中断。会も休眠に。

何年か後、昭和四十年ごろもう一度チャレンジ。二回目の同窓会を作ったもののサラリーマンには時間の確保が厳しく消滅。

その同窓会が転機を迎えたのが附属中三十周年記念。当時の高木副校長から「もう一度同窓会を作ってほしい」とのご依頼。「判りました。やりましょう」と返事。早速二期生野崎君に連絡し「また手伝ってくれ」「了解」いつも頼りがいのある友だ。

この三回目の同窓会設立の基礎となったのが、昭和四十六年作成の附属中同窓会名簿。これは当時河地先生が、この辺で同窓会名簿も作っておいた方が良いのではと考えられ、一年余をかけて完成して頂いたもの。これを支えたのが当時学生であった木野君（十六期）を中心とする若き名簿編集委員たち。当時私は会社業務が忙しく同期の名簿を用意するくらいしか出来なかったが、河地先生と木野君には大感謝。

この名簿をもとに、三十周年そして第三回目の同窓会発足に向け、河地先生の助言を受けつつ各期幹事名簿を作成。これら幹事達の活躍が記念事業を支え同窓会の基盤を作り、その後の発展の原動力となった。この時の寄付金で同窓会が講堂の緞帳と演壇の修復を行ったと記憶。

また、河地先生にはその後も同窓会活動に絶大なご支援を頂き、今も特別顧問として顧問会議への出席等貢献して頂いている。

この時、同窓会規約も作り直し、会長任期は三年と定めた。これはいつ迄も一期生や二期生が会長に居座ると役員の老齢化が進み、若い人達がついてこれなくなる事を恐れた為で、会長交代を早め若い力を注入する趣旨。

この結果私のあと、二代目野崎君（二期生）、三代目広瀬君（四期生）、四代目石原君（五期生）、五代目矢島君（十期生）迄は三年交代が実現したが、その後円滑に引き継げなくなり、矢島君には十三年の長きにわたる苦労を強いて申し訳なかった。

この矢島政権のとき、副会長木野、事務局伊東（十五期生）のトロイカの活動で同窓会が大発展し、附属中吹奏楽部に三百万円相当の楽器を寄贈する事も出来た。これは附属中を知り尽くした伊東君が吹奏楽部の窮状に気付き、ある会合で「ねえ新井さん　こういう事は無理ですかねえ」と口を開いたのがキッカケ。

又、矢島君の時代、平成九年の附属中五十周年事業に同窓会も大活躍。県立音楽堂の確保には七期生新堀君（故人）が骨を折り、寄付金募集には伊東君が奮闘して「おぬしやるのう」と感服。

矢島君のあとは六代目木野君が継ぎ、次の七代目中西君（十八期生）も長期活躍でご苦労をかけた。この時に入会金の増額を実現し、同窓会の財政基盤を確固たるものにする事ができた。

そして、今は八代目吉田君（二十期生）、同窓会旗も作り絶好調。同窓会の前途は洋々。とはいえ更に充実、発展し続ける為には卒業生全員の協力が必要。

その点、最近の顧問会議（河地特別顧問、歴代会長、長年事務局を率いた伊東君で構成）の出席率の悪いのが気がかり。オイ、みんなマジメに出て来い！

四・附属小学校同窓会

三回目の附属中同窓会を発足させた（昭和五十一年）あと、いずれは小学校の同窓会もと思ったものの私達の期が三十七期、一期生から三十六期生迄の名簿も無いなかで諸先輩に連絡の取りようもなく、又当時は附属小の卒業生の殆んどがそのまま附属中へ進んでいた状況から、何も同窓会を二つ作ることもないだろうと意欲減退。

しかし其の後、附属小から附属中へ進む生徒は逐次減少。今や附属小卒業生の半数は他中学校へ進むのが現状。この為もあり附属小から「小学校にも同窓会を」とのお声がかかり十数年前に発足。

但し、組織も無く、何をどう進めたら良いか思案も浮かばぬままの一人会長で、入学式、運動会そして卒業式への出席のみでヨチ、ヨチと。

しかし数年前からそれを見兼ねて「お手伝いしましょう」と申し出てくれた附属小六十八期生（附属中三十二期生）の中臣さんの協力を得ている。まだまだ大規模な同窓会総会を開ける実態ではないが、逐次体制も整い、副会長、会計監査にも六十八期生の人材を得て、昨年無事に会長職を中臣さんに引き継ぐことができた。

活動の一端として毎年二月、生徒達の校内作品展に合わせ「ホームカミングデー」を催しているので、ホームページをチェックしつつ来年は附属中同窓生も是非遊びに来て盛り上げてほしい。

五・愛しの野球部

まず文末の古い写真二葉を見ていただきたい。

上は我々二年時のユニフォーム、胸のマークは梅の校章（モ